HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの携帯電話利用リスクを保護者に伝える科学コミュニケーションイベントの設計と評価
Author(s)	郡, 伸子
Citation	科学技術コミュニケーション, 8, 65-76
Issue Date	2010-12
DOI	https://doi.org/10.14943/47092
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44527
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC8_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

報告

子どもの携帯電話利用リスクを保護者に伝える科学コミュニケーションイベントの設計と評価

郡　伸子

The Design and Evaluation of a Science Communication Event for Parents on the Risk of Chilidren's Use of Mobile-phones

KORI Nobuko

Keywords：technology communication, risk communication, mobile-phone, vulnerability

1. はじめに

子どもの携帯電話使用の是非についてはさまざまな議論がある．現在の携帯電話には，通話機能以外のさまざまな機能が搭載されており，そうした機能を子どもが不用意に使ってしまうことでさまざまなトラブルに巻き込まれるケースや，逆にトラブルを起こしてしまうケースが懸念されるからである．

これに対して文部科学省は2009年1月に，小・中学校への児童生徒の携帯電話の持ち込み原則禁止を通知し，学校には携帯電話を「持ち込ませない」という対策によって携帯電話使用をめぐるさまざまなリスクから児童生徒を守ろうという方針を示した．しかし，子どもにまったく携帯電話を利用させないということは現実的には不可能に近い．2010年1月に公表された携帯電話利用に関する実態調査[1)]によると，北海道内の公立小学校高学年（4～6年）の児童の5人に1人（19.1%）が携帯電話を所持しており，そのように自分の子どもに携帯電話を持たせている理由として保護者は，「家族間でいつでも連絡が取れるから」(35.5%)「居場所などがわかり，安心できるから」(34.5%) といった点を挙げている．一方で，同調査によると携帯電話の使用によって「何らかのトラブルに巻き込まれた」と回答した小学生の割合は，携帯電話を持っていると回答したうちの4人に1人（27.4%）に達していた．

こうした現状への対策として，これまで主に行政，学校関係者，携帯電話事業者等が，携帯電話使用のリスクを伝える講演会やパンフレット配布などを行っている．株式会社NTTドコモによる「ケータイ安全教室」もその一つであり，2004年の開始以来これまでに700回を超える教室が実施されたという[2)]．

インターネット時代の携帯電話の使用という「科学」や「技術」にかかわる情報を，社会の中での「生活」や「経済」「人権」に対するリスクとして正しく認識できるかどうかは，まさに「科学コミュニケーション」や「リスク・コミュニケーション」にかかわる問題である．こうしたリスクに関する具体的な情報や知識を，専門家が一般市民（携帯電話を子どもに持たせている，あるいは持たせ

2010年8月28日受付　　2010年10月18日受理
所　属：札幌市立和光小学校家庭教育学級
連絡先：ronchico214@ray.ocn.ne.jp

ようかどうか迷っている保護者）に，正確に，過不足なく，しかも実感を伴って伝えなければ，多くの一般市民をリスクから守ることはできない．さらに，専門家が非専門家である保護者の文脈を理解し，イベント全体を通じて，その文脈に沿った情報伝達ができるかどうかも，重要な課題であるといえる．

そこで筆者は，小学生の保護者を対象に，現代社会で子どもが携帯電話を使用した場合に考えられるリスクを，正確に，過不足なく伝え，当事者として実感を伴って理解されることを目標にした情報伝達イベントを設計し，実施することとした．筆者が実施した科学コミュニケーションイベントと従来の講演会等との主な相違点は，①できるだけ顔の見える小規模イベントとし，講演者（専門家）と参加者（一般の保護者）とが双方向のコミュニケーション（対話）がしやすい雰囲気の醸成，②イベント内で携帯電話サイトのトラブルを参加者が体験することにより，より実感を伴ってリスクが理解できるコンテンツの実施，③ネット社会の中で具体的にどのような脆弱性（vulnerability）を持っているかを，参加者が認識するための自己記入式「バルネラビリティシート」の導入，の3点である．さらに，保護者の実情を考慮した上で具体的かつ実際的な情報を提供することが「保護者の文脈に沿った情報提供である」と考え，このイベント全体を通じて，日常生活の中で携帯電話のリスクをいかに低減するかといった保護者の文脈に沿った情報提供ができるかどうかもあわせて検討した．

イベント実施後には参加者アンケートを行い，子どもの携帯電話使用に関するリスク伝達のためのコミュニケーション手法としての評価を行った．評価にあたっては，上記の3点の工夫によって，参加者の文脈に沿った情報提供が当事者として実感を伴う理解につながったかどうか，さらに，脆弱性を認識することが主体的にリスクを低減することにつながったかどうかを中心に分析した．

2.　イベントの設計

2.1　基本設計

イベントの設計にあたっては，先行する取り組みの一つとして，筆者もメンバーとして参加した北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット（CoSTEP）の2007年度プロジェクト実習「津波のリスクを地域住民が正しく知るための手法の開発」(隈本ほか 2008) で行ったイベントを参考にした．このイベントは，将来の津波被害が想定される地域において，津波の専門家と非専門家（地域住民）との直接対話の場（双方向コミュニケーションの場）を創出し，住民の文脈に沿った情報伝達を行うことを目指すものであった．またイベントの設計では，住民自身が津波に対する脆弱性を持っていることを実感してもらうため，低い津波でも実際に襲われると危険であることを映像で紹介する項目，自らの脆弱性についてチェックシートに書き込んでもらう項目が加えられていた．同プロジェクトは，2007年度から2009年度にかけてすでに計5回のイベントを実施し，参加者アンケートの分析から，住民の文脈に沿った専門家からの情報伝達と自身の脆弱性の認識によって，津波のリスクについての理解が深まったという評価が得られている．

本イベントでは，小学生の保護者を対象に，現代社会で子どもが携帯電話を使用した場合に考えられるリスクを，正確に，過不足なく伝え，当事者として実感を伴って理解されることを目標にした情報伝達イベントを設計した．この目標に到達するための手法として，従来の「ケータイ安全教室」のプログラムを変更し，専門家からの情報提供に，新たな項目として以下の2点を加えた．

(1) サイトに潜む危険性や書き込み内容の実態を保護者が実感するために，実際のサイトをリアルタイムで体験する

(2) 日常生活の中で被害を受けやすい家庭の弱さ，すなわち脆弱性を認識するために，保護者が「バ

ルネラビリティシート」に記入する

さらに，専門家からの情報提供の内容が，より保護者の文脈に沿ったものになるように，筆者を含む家庭教育学級の5人の保護者が企画段階でさまざまな検討を行い，小学生の保護者の視点で，どのような情報を知りたいか事前に検討し講師にあらかじめ伝えるという方法も講じた．

当初，グループワークの中で家庭での脆弱性を認識し合うためのグループ討議を含めることも考えていたが，「限られた時間の中で，身近な保護者同士の話し合いよりも専門家から情報を収集して有益な時間にしたい」「グループファシリテーターを担当するのが負担になる」という意見から，本イベントでは見送ることとした．

こうした経緯を踏まえて，イベントの基本設計は，①専門家からの情報提供，②映像による体験，③バルネラビリティシートの記入による脆弱性の認識の3部構成とした．

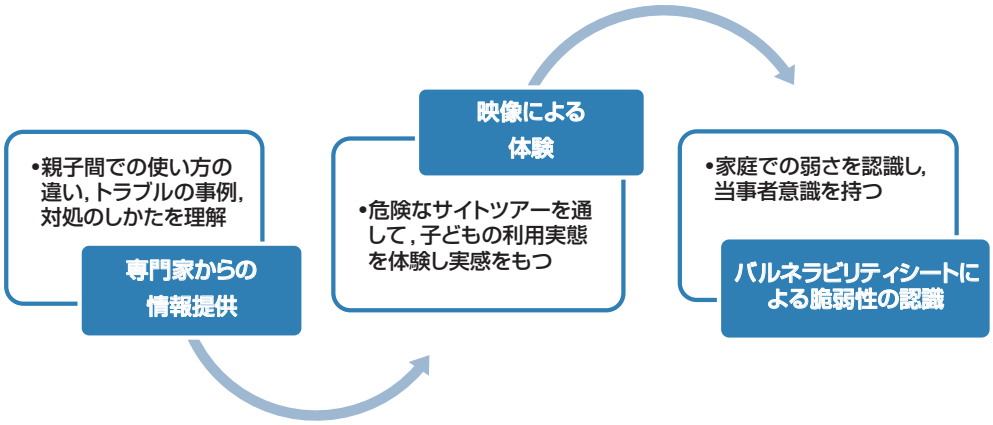

図1　イベントの基本設計

2.2　専門家の選定

専門家には，携帯電話サービス事業者である（株）NTTドコモから「ケータイ安全教室」講師田中真澄氏と「お客様相談室」室長安住浩氏の2名を講師として招いた．田中氏は，2004年から北海道内の小学校・中学校・高等学校，及び保護者や教員，PTAや地域コミュニティなどで「ケータイ安全教室」を実施し，教育現場と関わりが深く，子どもたちが抱えている問題に精通している．安住氏は，日々のお客様相談室の業務で，利用者からの意見・相談・質問・要望に対応している．

子どもたちが携帯電話を利用する現場の視点と，技術・サービスを供給する企業側の視点の双方を持つ専門家を選び，コンテンツの作成に協力を願った．

2.3　コンテンツの作成

2.3.1　映像による体験

従来の（株）NTTドコモが実施している保護者を対象とした「ケータイ安全教室」は，講師が情報提供し，最後に質疑応答の時間を取る講演会形式で，携帯電話の正しい使い方の普及活動である．

今回，イベントの設計にあたり既存のプログラムを変更し，保護者が携帯電話利用のリスクを正しく，実感を伴って理解するオリジナルプログラムとした．専門家からの情報提供を行った後に，「子どもたちが携帯電話をどのように利用しているか実態を知りたい」「どんなトラブルがネットに潜み，なぜ子どもたちが巻き込まれるのか知りたい」といった保護者の文脈に沿って，リスクの高いサイトをリアルタイムで大型のTV画面に映し出し，保護者が体験できるコンテンツを加えた．具体的な事例には，お客様相談室に寄せられる相談のうち，子どもが巻き込まれやすいトラブルの上

位を占める「無料ゲームサイト」「自己紹介プロフィールサイト」を選んだ.

こうしたリスクの高いサイトを保護者個人がアクセスすることは不安が大きく躊躇しがちだが,安住氏がガイド役になって参加者全員で体験することで,安心してサイトに足を踏み入れることができると考えた.このコンテンツは,携帯電話のボタンを操作するだけで際限なくサイトが展開していく実態を参加者一同が共有し,子どもたちの利用状況を理解し,サイトに潜むリスクを実感することを目標とした.

2.3.2　バルネラビリティシートによる脆弱性の認識

子どもが携帯電話を利用する際に,日常生活の中でリスクを低減または回避するためには,保護者自身が被害を受けやすい自身の弱さ,すなわち脆弱性を認識し,行動を変容させることが必要と考え,脆弱性を認識するための「バルネラビリティシート」を作成した.

吉川 (1999) は,米国の社会心理学者キニー (Keeney) らが提唱したリスク・コミュニケーションの重要点,すなわち (1) リスク,リスク分析,リスク管理について人々をよりよく教育すること.(2) 特定のリスクについて,またそれらを低減するための行動について,人々に十分に知らせること.(3) 個人的なリスクを低減する手段を奨励すること.(4) 人々がもっている価値や関心についてよりよく理解すること.(5) 相互の信頼と信憑性を促進すること.(6) 葛藤や論争を解決すること,の6点を紹介し,コミュニケーションを円滑に効率的に行うためには,正しくリスクを伝えるための戦略が必要であると述べている.

これらの点に留意して子どもの携帯電話利用のリスク・コミュニケーションの具体的な戦略を考えると,保護者の文脈に沿った情報提供をするだけでは不十分で,(2) 特定のリスクについて,またそれらを低減するための行動について,人々に十分に知らせることと,(3) 個人的なリスクを低減する手段を奨励すること,が必要となる.日常生活の中でリスクを低減または回避するためには,参加した保護者自身が当事者意識を持ち,被害を受けやすい自身の弱さ,すなわち脆弱性を認識することが必要であると考えた.

そこで,子どもが携帯電話を利用する事例にあてはめて考えた場合,個人的なリスクとは,子どもがさまざまな携帯電話のトラブルの被害者になること,さらに加害者になることと想定した.そうしたリスクを家庭で制御するために,携帯電話の使用習慣および使用環境,親子のコミュニケーション,約束事の観点から「リスクに対する備えがあるかを確認する質問」として5つの項目を考案し,参加者に回答してもらうこととした.

表1　バルネラビリティシートの質問項目と質問の意図

リスクに対する備えがあるかを確認する質問項目	質問の意図
V.1　保護者が良いお手本となっていますか? 食事中や深夜遅くまで携帯電話を離さない姿をお子さんに見せていませんか?	保護者自身が子どもの良い手本となって携帯電話を利用することに気づく
V.2　携帯電話は保護者の所有物,それともお子さんの所有物? 携帯電話を契約するときに,お子さんへのプレゼントとして渡していませんか?	契約者である保護者と利用者である子どもとの関係を明確にし,子どもを守る立場であることに気づく
V.3　携帯電話利用のルールを決めていますか? お子さんが携帯電話を利用する場所・時間帯,つながる相手を制限していますか?	家庭の事情にあったルール作りをする必要性に気づく
V.4　個人情報の取り扱いに注意を払っていますか? お子さんに個人情報を不用意に書き込まないことを教えていますか?	インターネットにつながっていれば不特定多数と関わることに気づく
V.5　相談しやすい親子関係ですか? 知らない人からのメールや,チェーンメールの相談をお子さんから受けますか?	子どもが独りで問題を抱え込まないように相談しやすい関係を保つことに気づく

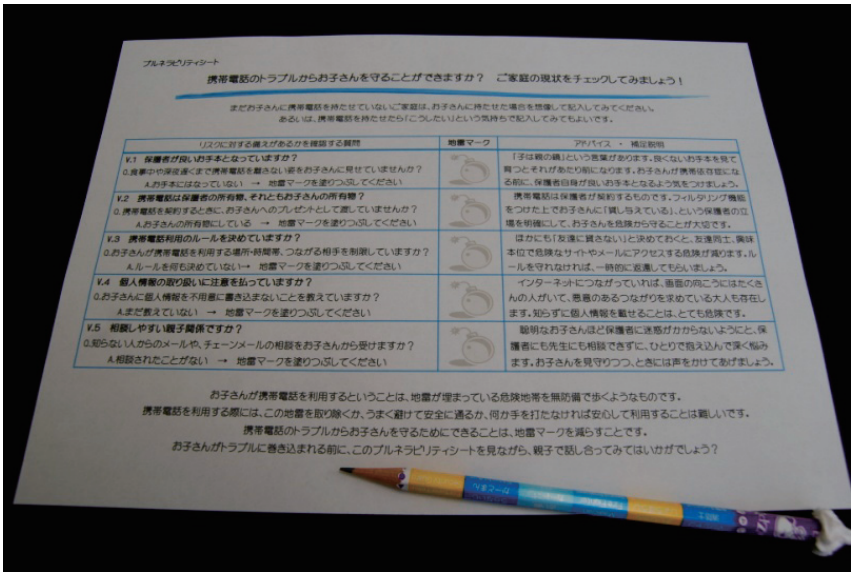

図2　イベントで使用したバルネラビリティシート

イベントの中で，参加した保護者が該当する項目の「地雷マーク」を塗りつぶすことによって，家庭の脆弱性を認識できるようバルネラビリティシートを作成した．筆者はインターネットの世界を法律や秩序のない，いわばどこに地雷が埋まっているかわからない無法地帯と例えた．携帯電話サービスのシステムに潜む危険性を地雷とし，無防備な子どもがさまよい危険な目にあう無法地帯で，いかに地雷を回避するかがリスクを低減することにつながると考えた．地雷を取り除くことはインターネットのしくみを変えることを意味し，保護者一人の力で容易にできないが，地雷を踏まないように家庭内の脆弱性を認識すれば危険な目にあう確率は低くなることを保護者自身が気づくことをねらいとした．

3.　イベントの実施

3.1　イベントの概要

筆者が，札幌市立和光小学校で開催した科学コミュニケーションイベントの概要は下記のとおりである．筆者は，当該年度の同校家庭教育学級の学級長であり，このイベントには主催者として携わった．

■　イベント名：　「どうなっているの？子どもたちを取り巻く携帯電話事情」
　　～今からでも遅くない‼家庭で防げる携帯電話トラブル～
■　対　　象　：　札幌市立和光小学校保護者
■　日　　時　：　2010年2月8日（月）　10:00～12:00
■　会　　場　：　札幌市立和光小学校　音楽室
■　講　　師　：　（株）NTTドコモ　田中真澄氏（ケータイ安全教室事務局課長代理）
　　安住　浩氏（お客様相談室室長）
■　参加人数　：　22名（保護者20名，教員2名）
■　主　　催　：　札幌市立和光小学校家庭教育学級

3.2　参加者のプロフィール

1年生の保護者は3名，3年生4名，4年生9名，5年生4名で，事後アンケートの結果（回答者19名）によると，このうち小学生の子どもに携帯電話を持たせているのは19名中3名であった．また子どもが携帯電話の被害にあったことのある経験をもつ保護者は参加していなかった．また，子どもと携帯電話の利用について話したことがある保護者は19名中14名で，残り5名は話したことがなかった．

3.3　プログラムの実際

3.3.1　専門家からの情報提供（予定45分/実施結果50分）

専門家に田中氏を迎え，子どもたちの携帯電話の利用実態，トラブルの事例紹介，トラブルの制御方法について情報提供し，実話に基づく再現ビデオ（5分）を放映した．保護者にとって携帯電話は，メール・通話機能を重視した道具であるが，子どもたちにとっては「ケータイ」という多機能情報端末になっている実態，出会い系サイトや架空請求メールの被害者になる事例，ブログやプロフィールサイトの掲示板で加害者になる事例を紹介し，ケータイトラブルから子どもを守るために親が知っておくべきことを，スライドを使って情報提供した．

図3　スライド画面を見つめ，田中氏の情報提供を真剣に聴く参加者

3.3.2　映像による体験（予定30分/実施結果45分）

続いて，安住氏がガイド役となって参加者一同で危険なサイトを体験した．冒頭で携帯電話のGPS機能を使い，携帯電話を接続した大画面のTVモニターに現在地を示した．位置検索システムとして便利な機能である半面，プロフィールサイトやブログの書き込みで公開すれば，リアルタイムで現在地を特定し危険を招くおそれのある機能であることを保護者に伝えた．さらに，子どもたちの間で人気の高い「無料ゲームサイト」「プロフィールサイト」にアクセスし，高額請求や個人情報流出のしくみを説明しながら，危険性を知らずに登録・書き込みをしている実態を見せた．こうした具体的な事例を映し出しながら，サイトに潜む危険性や書き込み内容の実態を伝えた．

保護者は，無料の領域からクリックするだけで有料の領域に突入する実態，該当する小学校名・近隣の中学校名で検索するとプロフィールサイトに登録している児童が特定される実態，携帯電話のボタンを操作するだけで際限なくつながっていく実態を，周囲の保護者と話を交えながら体験していた．

図4　左：サイトに接続した携帯電話画面を撮影する小型カメラ
右：TVモニターにリアルタイムで映し出された携帯電話画面を見つめる参加者

3.3.3　バルネラビリティシートによる脆弱性の認識（予定10分/実施結果10分）

参加者に「バルネラビリティシート」を配布し，筆者が進行役を務め，質問項目を読み上げた．参加者は項目ごとに自身の家庭での状況を振り返り，該当する項目の地雷マークを塗りつぶした．その上で，再度アドバイスや補足説明を加えた．

図5　バルネラビリティシートを記入する参加者

3.3.4　質疑応答（予定25分／実施結果5分）

当初，参加者にA5サイズの質問用紙を配布し，5分間の振り返りの時間とし，疑問点，心配な点，感想を記入する予定であったが時間の不足により，用紙に記入する時間は取れなかった．このため，口頭での質疑応答を行った．「学校裏サイトへのアクセスの仕方」，「YouTubeを視聴する際のフィルタリングの有無」について質問があり，講師が回答した．

4.　結果と考察

イベント終了後直ちに（株）NTTドコモ社「ケータイ安全教室」のアンケート用紙[3]と，筆者が独自に作成したアンケート用紙[4]を配布した．参加者20名のうち19名から回答を得た．

4.1　参加者の文脈に沿った情報提供が，当事者として実感を伴う理解につながったか

イベント終了後回収したアンケートでは，専門家からの情報提供について，回答者19名中18名が「よく理解できた」，1名が「まあまあ理解できた」と答えた．また映像による体験は，15名が「よく理解できた」，4名が「まあまあ理解できた」と答えた．「あまり理解できなかった」と回答した参加者はいなかった．さらに，それぞれのコンテンツに対し「印象に残っていることは何ですか」と質問したところ，「恐ろしさ・怖さ」に関する記述が5か所，「驚き」に関する記述が6か所，「簡単」に関する記述が7か所あった．こうした感情を表現する記述が目立っている背景には，子どもたちの携帯電話利用状況を客観的事実として受け止めるだけでなく，被害の様子をドラマ仕立てにした映像やリアルタイムで接続した携帯電話の画面を通して，参加者が危険なサイトへのアクセスの簡単さ，不安や驚きを実感したことがあると言えよう．

また，「参加前と後で，携帯電話へのイメージが変わったか」という問いに対し，19名中14名が「変わった」，2名が「どちらでもない」，2名が「変わらない」，1名が無回答であった．「変わった」と回答した14名の中には，具体的に「便利なものとして安易に使っていたが，ヤミの部分もかなり大きいことが再確認できた」「なんとなくイメージしていたものを実際に見ることができ，はっきりと感じとることができた」「連絡に使うものだと思っていたが，小さな携帯できるパソコンだと思った」と記述している保護者がいた．こうした記述から，イベント前は子どもの居場所を確認でき，

便利で安心感を得られる道具として携帯電話を位置づけていたが，携帯電話のリスクを実感を伴って理解したことがうかがえる．全体を通しての自由記述欄には，「言葉はニュースなどで耳にしていても内容が分からなかったので，とても勉強になった」「知らずに心配していた点の具体例を聞けて良かった」「具体的な危険性およびなぜ危険な状態にさらされるかがわかり，とても勉強になった」「映像を使うとよりリアルにわかった」という意見もあった．こうした結果から，到達目標としていた保護者の文脈に沿った情報提供がほぼ実現し，おおむね当事者として実感を伴う理解につながったといえよう．

さらにアンケート全体を通して，「使い方によってとても危険なものなので，子どもにまかせきりにはできない」「子どもが興味を持ちそうな所に，より一層気をつけて行かなければいけない」という記述もあった．これらの記述から，参加者が問題をしっかりと考えようという動機づけが高まり，当事者としてリスクを捉えている姿勢がうかがえる．子どもに携帯電話をもたせていない参加者が多かった中で，他人事・一般論として捉えていたリスクを，専門家からの情報提供・映像による体験を通じて当事者として意識を高めていったと言えよう．

4.2　脆弱性を認識することが，主体的にリスクを低減することにつながったか

事後アンケートで「バルネラビリティシートの記入により家庭の状況を認識できたか」という質問に対し，参加者19名中16名（84%）が家庭の「現状を認識できた」，2名が「どちらでもない」と答え，1名は無回答であった．「認識できなかった」と答えた参加者はいなかった．また「参加後，子どもと携帯電話について話し合うか？」という問いに対し，19名中17名が「話し合う」，1名が「話さない」，1名が「わからない」と回答した．

さらに，リスクを低減するために家庭で対処したい項目について質問したところ，12名の保護者の回答から下記のような結果が得られた（事後アンケートへの回答者19名のうち，この質問に答えたのは12名だった）．

表2　リスクを低減するために家庭で対処したい項目

項目	リスクを低減するために家庭で対処したいこと	今すぐ対処したい	できれば対処したい	対処の仕方がわからない	対処する必要がない
V1	保護者が手本となる	6	0	0	3
V2	携帯電話を子どもの所有物としない	2	4	0	3
V3	家庭でのルールをつくる	2	2	1	2
V4	個人情報の取り扱いを教える	3	1	0	3
V5	相談しやすい親子関係を築く	4	3	0	1

V1は，子どもが携帯依存症になる前に保護者自身が子どもの良い手本となって携帯電話を利用することに保護者が気づくことを目的とした項目であった．「今すぐ対処したい」と回答した参加者は11名中6名で，「対処する必要がない」と回答した保護者は3名いた．全体を通しての自由記述欄には「親（私）がお手本になっていなかったことに気づき，反省している」という記述もあった．他の項目に比べると今すぐ対処したいと回答した人数が多い．これは，自身の携帯電話利用状況を省みたとき，すぐに対処・改善できる項目と認識したことがうかがえる．

V2は，携帯電話の所有者を保護者と位置づけることで，子どもを危険から守る立場にあることを保護者が自覚することを目的とした項目であった．この項目に対し，「今すぐ対処したい」の2名

よりも「できれば対処したい」の4名が上回っている．脆弱性を認識していても，リスクを低減する行動に直結していないことがうかがえる．

V3は，家庭の事情にあったルールづくりをする必要性を認識する項目であった．回答は，「今すぐ対処したい」「できれば対処したい」「対処の仕方がわからない」「対処する必要がない」それぞれの項目にほぼ均等に分散している．全体を通しての自由記述欄には「子どもがロックして管理できない場合，どうしたらよいのか不安になる」「いずれ買い与えるときに，事前に親子で話し合うことやルール決めが大切だと思った」という記述もあった．こうした結果は，すでに子どもに携帯電話を持たせている場合には脆弱性を認識しても対処することが難しいことを示唆している．V2，V3は，子どもに携帯電話を持たせている参加者は3名であったため，持たせた場合を想定して記入してもらった．本イベントでは，19名中16名が子どもに携帯電話を持たせていない保護者であったが，携帯電話を持たせる前に脆弱性を認識していることで対処しやすく，携帯電話を持たせる際にはリスクを低減できる項目となるであろう．

V4は，インターネット上で個人情報を開示する危険性を保護者が認識する項目であった．「今すぐ対処したい」が3名，「できれば対処したい」が1名いた．これは脆弱性を認識できれば，すぐに対処しリスクを低減できる項目といえるだろう．

V5は，子どもがトラブルにあった場合に相談しやすい親子関係が，トラブルを拡大させないことにつながることを認識する項目であった．「今すぐ対処したい」と回答した参加者は4名，「できれば対処したい」が3名で，「対処する必要がない」と回答した保護者は1名であった．これまでの項目と比較すると，「対処する必要がない」と回答した保護者の数が少ない．また，全体を通しての自由記述欄には「携帯電話ひとつでも，親子の信頼関係が問われるのだな．これから子どもへの関わり方を考えたい」「何かあっても話し合えて，解決できる親子関係でありたい」「正しい使い方を子どもと話し合っていきたい」という記述もあった．こうした結果から，携帯電話の所持に関係なく，保護者が脆弱性を認識しやすく，リスクを低減しやすい項目であったといえよう．

また，アンケート全体からの意見には，「いつ頃持たせようかと考え始めていたころの講演会だったのですが，もっと慎重に考えようと思った」「使い方によってはとても危険なものなので，子どもにまかせきりにできない」といった記述もあった．こうした記述から，保護者自身が携帯電話のリスクを受け止め，さらには適切な利用のしかたや子どもとの関わり方において変化があったことがうかがえる．

こうした分析から，おおむねバルネラビリティシートが役割を果たし，参加者が脆弱性を認識し，日常生活の中でリスクを低減するきっかけになったといえ，当初設定していたイベントの目標は，基本的に達成されたと考えられる．

5. 課題

本イベントのプログラムは，保護者を対象に子どもの携帯電話利用リスクを伝え，当事者として実感を伴ってリスクを理解することを目標とし，4章での考察からおおむね目標は達成し，基本設計は適切であったと言えるが，実施を通じていくつかの問題点・課題も明らかになった．

5.1 プログラム実施上の課題

本イベントを設計するにあたり，できるだけ顔の見える小規模イベントとし，講演者（専門家）と参加者（一般の保護者）とが双方向のコミュニケーション（対話）がしやすい雰囲気を醸成することを目指した．しかし実際には，保護者20名と少人数で顔見知りの関係であったにもかかわらず，

活発な双方向のコミュニケーションには至らなかった．その理由として，時間管理が十分にできなかったために，当初予定していた25分間の質問時間を5分間に縮小したこと，ファシリテーターが対話しやすい雰囲気を醸成する役割を果たせなかったことが考えられる．参加者は人前で発言することに抵抗感があるという前提で，各自振り返りの時間を取り，参加者が質問用紙に記入した疑問点，心配な点，感想を，筆者が読み上げ，専門家が回答していく予定であったが，実際にはそうした時間を確保できなかった．イベント後，参加者から「もう少し詳しく説明を聞きたかった」「明確な答えが知りたかったが答えが出ず，もやもやとした感じが残った」といった意見も出された．これは，質問時間が十分に取れなかったことで，消化できない感情が残ったことを意味するであろう．2時間という限られた時間で，参加者の満足度を得るためには，一方向でのコミュニケーションでは不十分で，時間管理を厳密に行って対話の時間を十分に取り，筆者がファシリテーターとして講演者と参加者との対話を成立させることが必要であった．今後の課題として，余裕を持った時間配分でプログラムを運営し，ファシリテーターが役割を果たし，双方向のコミュニケーション（対話）がしやすい雰囲気を醸成する工夫が必要であろう．

5.2　バルネラビリティシートの改善点

本イベントでは，子どもに携帯電話を持たせる保護者がネット社会の中で，具体的にどのような脆弱性を持っているかを認識するための自己記入式「バルネラビリティシート」を導入した．このシートは，4章の考察からおおむね役割を果たしたと言えるが，参加者がより効果的に脆弱性を認識するためには，改善すべき点がいくつかある．バルネラビリティシートには，「リスクに対する備えがあるかを確認する質問項目」「地雷マーク」「アドバイス・補足説明」を一覧表にして載せてある（図2参照）．イベントの中で，筆者が進行役を務め「リスクに対する備えがあるかを確認する質問項目」を読み上げ，参加者は「地雷マーク」を塗りつぶし，再度筆者から「アドバイス･補足説明」を加えるという流れをV1からV5まで繰り返した．参加者には「地雷マーク」を塗りつぶす際，一覧表に載っている「アドバイス・補足説明」は見えていた．より脆弱性を認識するには，参加者が家庭の状況を省みる時間が必要で，その後に設問の意図やアドバイスを説明するほうが効果的であった．改善点として，配布する際に「アドバイス・補足説明」の部分を隠し，すべての説明を終えてから示すことが挙げられる．

また，「バルネラビリティシート」の記入と，終了直後のアンケート設問の中にある「リスクを低減するために家庭で対処したい項目」の記入において，伝わりにくい点があった．参加者から「はっきりと地雷マークを塗りつぶすのが難しいものが多く，困った」という意見があり，アンケートでは何も記入していない参加者が7名いた．参加者がこのようなわかりにくさを感じた背景には，「バルネラビリティシート」の役割が十分に伝わっていなかったことがあるだろう．明確な答えを示すのではなく，保護者が家庭の具体的な脆弱性を認識するプロセスに意味があることを，事前に伝えきれなかったために参加者を困惑させたのかもしれない．今後は，「バルネラビリティシート」の内容，レイアウトを改善し，脆弱性を認識することの意味を，記入前に理解してもらう必要があるだろう．

謝辞

まず本イベントの設計から実施まで，講師である株式会社NTTドコモの安住浩氏ならびに田中真澄氏，そして札幌市立和光小学校の教職員，保護者のみなさまにご協力をいただきましたことを深く感謝いたします．また，本イベントの記録を撮影しカメラマンとしてお手伝いしてくださった塚本卓氏にはお世話になりました．これらの方々に厚く御礼申し上げます．

注

1）北海道青少年有害情報対策実行委員会「携帯電話の利用に関する意識等調査結果」(2010年)．
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/52A18E26-0B8E-4081-8570-D03AC2A5C4D5/0/repogaiyo.pdf

2）2009年7月現在の北海道内での実施回数．

3）(株) NTTドコモ社「ケータイ安全教室」のアンケートの質問項目は次の通り．

Q1.　お子様に携帯電話を持たせていますか？　はい　　いいえ
- ・いつから持たせていますか？
- ・名義はどなたですか？
- ・持たせた理由は何ですか？
  ①家族との連絡用に　②　防犯対策として　③　欲しいと言われたから　④　その他
- ・ケータイの使い方についてルールを決めていますか？　①はい　②いいえ
  「はい」に○をつけた方はその内容を教えてください

Q2.　お子様が携帯電話に関するトラブルにあったことはありますか？　①はい　②いいえ
「はい」に○をつけた方はその内容を教えてください

Q3.　子どもの携帯電話使用に不安はありますか？　　①ある　　②ない
「ある」と答えた方は，どのようなことですか？

Q4.　フィルタリングサービスを知っていましたか？　　①はい　　②いいえ

Q5.　子どもたちがケータイを使用する際に，フィルタリングサービスを設定していますか？
①設定している　　②設定していない　　③わからない
上記で○をつけた理由を教えてください

Q6.　本教室のような内容は，誰が教えるのが効果的だと思いますか？またその理由をお聞かせ下さい
①学校　　②　家庭　③　携帯電話会社　　④　その他
上記で○をつけた理由を教えてください

Q7.　ネットでのトラブルやいじめをなくすためには，どうすれば良いと思いますか？

Q8.　今回受講した「ケータイ安全教室」を今後どのように活用しようとお考えですか

Q9.　携帯電話やインターネット等について「教育の場（講演会等）」は必要だと思いますか

Q10.「ケータイ安全教室」へのご意見，ご感想などがありましたらご記入ください

4）筆者が独自に作成したアンケートの質問項目は次の通り．

Q1.　参加する前と参加した後で，携帯電話へのイメージは変わりましたか？
変わった　　どちらでもない　　変わらない
具体的には・・・(　　)

Q2.　田中講師による基礎講座について，おたずねします．
①内容について：　　よく理解できた　　まあまあ理解できた　　あまり理解できなかった
②特に印象に残っていることは何ですか？

Q3.　安住講師によるサイト疑似体験について，おたずねします．
①内容について：　　よく理解できた　　まあまあ理解できた　　あまり理解できなかった
②特に印象に残っていることは何ですか？

Q4.　バルネラビリティシートについて，おたずねします．
①バルネラビリティシートはわかりやすかったですか？：　はい　　いいえ　　どちらでもない

②ご家庭の現状を　　:　　認識できた　　認識できなかった　　どちらでもない

③下の表のあてはまるところに○をつけてください

	V.1	V.2	V.3	V.4	V.5
を塗りつぶした設問に○をつけてください					
今すぐに対処したいものに○をつけてください					
できれば対処したいものに○をつけてください					
対処したいが対処のしかたがわからないものに○をつけてください					
対処する必要がないものに○をつけてください					

Q5.　これまでお子さんと携帯電話について話したことはありましたか?　　はい　いいえ　わからない

Q6.　今日の講演会に参加して，お子さんと携帯電話について話し合いますか?　　はい　いいえ　わからない

Q7.　ご意見・ご感想があればお聞かせ下さい.

●文献：

吉川肇子 1999:『リスク・コミュニケーション』福村出版.

隈本邦彦ほか 2008:「津波のリスクを地域住民が正しく知るための手法の開発と評価」『科学技術コミュニケーション』, 4, 3-18.